

## あるときは「お兄ちゃん」、 あるときは「のん先生」

末永芽久・野中健一

いきなり内輪の話で恐縮ですが、末永の兄が江戸川乱歩の研究仕事に関わって一年。すっかりセンターでお世話になっていきます。出不精の兄がこれほど活躍するとは！

きっかけは、乱歩が遺した物品資料の撮影に始まります。立教大学人文研究センタープロジェクト「人文学資料の情報メディア化に関する新たな手法開発と適用」（代表野中健一）で、物質文化資料のデジタルアーカイブ化の事例として取り上げました。

この仕事は、物品リストに記された資料を画像に撮っていくことでした。ですがこれが実はたいへん。衣類、装飾品、生活小物、家電品、家具、楽器、人形、玩具、カメラ、フィルム、ポストカードなど一五〇〇点以上の品々が、立教大学のはずれの一室に収蔵されていきました。種類も大きさもたいへん多岐にわたっています。そのため、資料の大きさや素材に合わせて撮影せねばならず、また、それらの多面的な

価値に気づけるような写真が望まれます。それならば専門のカメラマンに任せれば、と思われるかもしれませんが、これまでの経験でそう簡単にはいかなることがわかっていました。むしろそれを試行錯誤しながら実践していくことがこの研究プロジェクトの実践例となり、今後の課題を見つげるためにも重要だろうとも考えました。

そのためには、このような曖昧な状態でも引き受けてくれ、なおかつ撮影技術やセンスをもって、資料の取り扱いもできる人材が望まれます。そこでも候補となつたのが、野中が担当する文化環境学ゼミに所属する末永でした。ミニチュア製作やその撮影経験の実績、野中が進めていた地域博物館作りに参加しており、物質文化資料の取り扱い経験をもち、野中の研究補助のアルバイト経験からあいまいな仕事依頼にも応じられようとの判断です。準備を進めていくうちに、資料の扱い、撮影の段取り、撮影で人手を要すること

がわかりました。そこで、撮影に精通している末永の兄が参加すると、スムーズかつ確かな技術で進めていけるのではないかと考えたのです。野中も作品を見て、そのこだわりと技術・表現力の高さを評価していました。また、末永の母が写真館勤めをしているので、衣類の取り扱い、着付けや撮影段取りなどに精通していました。この三人体制でチームを作って撮影を進めることにしました。



撮影は兄に任せられたのですが、なかなか同意せず、しかし：兄は幼少期から乱歩作品のファンで、少年探偵団シリーズも読破していました。乱歩本人が使っていた物、作品にまつわる物に直に接することができる、こんな機会はまたとありません。「乱歩だよ、乱歩だよ」とせっついていった結果、さいしよは教えるだけなら、ということとで来てくれることになりました。実際に撮影を始めていくと、あの江戸川乱歩が実際に使っていたものを直接目にするができることがどれほど貴重な体験であるかを実感し、同時に、一人では不可能な仕事であることを痛感、技術面は兄に任せることが決まりました。妹の画策はうまくいきました。



写真2 限られたスペースで寒さに耐えながら撮影



写真1 機材が足りない中で工夫しながら撮影

初の出勤は、二〇二二年一月十五日、冷たい雨の降る寒い日でした。所蔵品の収蔵されているところへ行つたところ、野中と丹羽先生との連絡がうまくいっていなかったのか、警備の方から不審者扱い。いざ現場に行くも撮影スペースの狭さや機材の準備など、ゼロからの撮影準備がどれほど大変なことがわかってきました。また、当初は撮影形式がなかなか定まらず、撮影画像は最低限、リストに画像情報を付け加えるようなインデックス写真でも良いという話もあれば、三方面から撮って欲しいという話もあり、かなり困惑しました。使用意図が分からないまま撮影を進め、さまざまな事態に直面しては、戸惑いつつ、悩みつつ、その都度三人で相談しながら対処していきました。コロナ禍の中、他人との密な接触がはばかれる中、狭い撮影スペースでの作業が続けられたのは、この家族チームだからこそだと思えました（写真1・2）。

この仕事は、体力・気力を要します。めげることなく必要な物品資材を提案し、現場で工夫を重ねて対応して撮影にあたった兄は、当初、勤務を終えてなんとか家にたどり着けるほど疲労困憊していました。それでも継続できたのは、この仕事を通じて乱歩の世界を知れることのわくわく、楽しみ、それゆえにさまざまな発見のできることにありました。

愛用物の見せ方を考え（写真3）、資料の由来や、乱歩作品にどのように関係しているのかなどを話し合いながら撮影し、資料に関する情報の追加や修正も行いました。真摯に資料と向き合ったからこそその成果です。

物品資料撮影が一段落してきたら、次には映像資料のデジタル化を頼まりました。これによってセンターで仕事をするようになり、丹羽先生はじめセンターのみなさんと顔を合わせるようになりました。撮影当初は、野中から派遣された正体不明の人物であった兄でしたが、その仕事ぶりや趣味の知識を活かしたPCやプリンタの微調整などが評価され、徐々に打ち解けていきました。末永家では、電子機器類の設定や故障時にしばしば兄を頼り、お願いするときは兄の名（望夢・のぞむ）をとって「のん先生」と呼んでいます。それを聞いて以来、野中は兄を「のん先生」と呼び、センターでは、末永の兄なので「お兄ちゃん」と呼ばれるようになりました。ようやく得たが知れた？ ようでした。

センターに馴染むにつれ、撮影に对应するこだわりや機器類に関する豊富な知識技術を買われて、「お兄ちゃん、お願い」とつきつきとでてくる資料の写真・動画撮りや画像の加工などさまざまな仕事にも携わるようになりました（写真4）。

さまざまなモノや人と関わる中で、時にワクワク、時にクタクタになりながらも撮影を続け、今では江戸川乱歩邸のAR（Augmented Reality 拡張現実）やVR（Virtual Reality 仮想現実）化なども手がけようと野望を持つようになり「お兄ちゃん」のお手伝いから、「のん先生」の仕事へと変わっていきます。のん先生は、さらなる資料撮影、4Kビデオ撮影や動画編集、3Dスキャンシステム作りに向けて勉強と実践を重ね、現場での撮影に向けて筋トレにも動しんで、今では逆に、「乱歩だよ、乱歩だよ」と、妹をせっついています。

（立教大学文学部学生）

（立教大学文学部）



写真4 土蔵での撮影にも協力

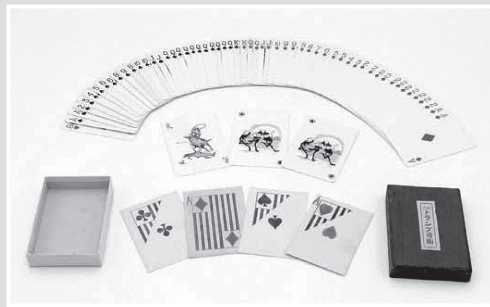


写真3 トランプの数字が不規則なことが分かるよう一枚一枚を配置（RF4-7）